# 朽葉色の鍵

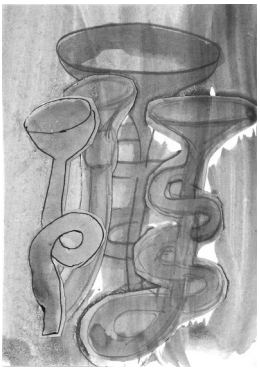
溝口志保

## 一

綾は子どものころから叔母の家に行くのが好きだった。そこには珍しいものがたくさんあった。なかでもリビングの隅の海賊船の宝箱を連想させる大きな木箱が、綾のお気に入りだった。本体には補強用の横木が三本、丸く弧を描くふたには五本打ちつけられていて、それぞれ継ぎ目を黒い金具で止めてある。ふたには鈍い金色の取っ手がついていて、その下に鍵穴がある。

「千花ちゃん、この中、何が入っているの？」

まだ幼稚園に通っていた頃、綾は聞いてみた。叔母は決して幼い姪っ子に「おばちゃん」と呼ばせなかった。



「ん？」

叔母は昼食のテーブルを調える手を止めて、大きな木箱を指さす綾のそばに腰をかがめた。そして、声をひそめて言うのだった。

「これはね、ずっと前、千花ちゃんが海賊をだまして盗ってきたの。たくさん宝石が入っているんだ」

綾は驚いて叔母を振り向いた。まん丸く見開いた目、少しすくめた肩。叔母は愛しそうに笑うと後ろから綾を抱いて、ちょっと体を揺らしながら続ける。

「でもね、鍵がね、見つからないの。いろいろ試してみたけど、鍵が開かないのよ」

「うちにも鍵はたくさんあるよ。持ってこようか？」

「ありがとう。でも、これは海賊の箱だから、とても特別

な鍵がいるの。ほら、ここ、この鍵穴にぴったりのやつだから大きな鍵よね、きっと。それに海賊の鍵だから、ぴかぴか光らない金色じゃないかなあ」

「こんな色？」

綾が取っ手を指さすと、叔母は頭をなでた。

「そうそう、こんな色だと思う。綾ちゃん見たことある？」

綾は少し頭を傾げ、それからかぶりを振った。

「そっか。もし見つけたら教えてね。開けられたら綾ちゃんにも宝石分けてあげる」

あれから八年経った。

叔母はあまり変わらない。八年前と同じ場所に独りで住んでいて、相変わらず不思議なものに囲まれている。姿形も、綾の目には少しも変わらないように見える。

『それに比べて』

と、綾は叔母のアパートのソファーに身を預け、木の鉢に飾られていた松ぼっくりを手に取って思った。

『今の私は子どものころの私じゃない。最悪の状況にいるめちゃくちゃな私だ』

今の父親は綾の本当の父ではない。母の再婚相手だ。とは言っても、母は綾が三歳のとき再婚したので、物心ついたときには「お父さん」と呼ばされていた。綾は内心、や

や筋肉質で綾のことを嫌っているらしいこの男を父と呼びたいとは思わない。実際、父親らしいことはしてもらっていないと思う。

「おいで」

「侑、お前はいい子だなあ」

「侑、偉いぞ」

血のつながりがあるだけでそんなにも愛の大きさが異なるものなのか。何かというと義父は「侑、侑」と妹を可愛がった。そして綾のことはほとんど見向きもしない。たまに綾にかける言葉は、

「お前は素直じゃない」

「綾は可愛い気がない」

といったものだった。

まだ小さかったころ、おそらく六〜七歳ぐらいだったろうか、侑はいたずら盛りだった。綾のノートを引っ張り出しては落書きをしたり、大切なキーホルダーを壊したりということが日常茶飯事だった。だから、綾は妹に自分の物を触られるのがとてもいやだった。その日も侑が手にする物を片っ端から取り上げて机の引き出しにしまっていた。すると、侑は姉の棚の物を引っ張り出すのをやめ、机の引き出しに手をかけた。それを阻止するべく、綾は片手で机の引き出しを押さえ、もう片方の手で妹の身体を押した。

侑は身体のバランスを崩し、椅子の脚にぶつかってから床にうつぶせに倒れた。そして火がついたように泣き出した。
父がリビングからやって来て、侑を抱き上げると、理由も聞かず綾の頬を平手で打ち、部屋を出て行った。
夕食時、母は綾の頬の真っ赤な手形を見ても何も尋ねなかった。母の気がかりはそんなことではなく、綾の箸の持ち方なのだろう。食事中、母が綾にかけた言葉は、
「綾、お箸、きちんと持ちなさい」
「綾、お箸の持ち方、また変でしょ」
の二言だった。

綾にとっては学校も楽しい場所ではなく、むしろとても疲れる場所だった。下手に何か言うとすぐトラブルになる。
仲良し五人組だと自称している綾のグループは、本当は仲良しなどではない。その場にいない子の悪口を言い合い、気づかぬうちに理由も分からないまま仲間外れにされる。それぞれに言い分があるのは分からないでもない。世の中に欠点のない人間はいないだろうから、わがままだったり、必要以上におしゃべりだったり、運動が苦手だったりする人がいるのは当然だ。それを本人がいないところで寄ってたかって陰口をたたき、挙げ句の果てはこの世で最も鼻持ちならない人間、いや、それ以下のように扱う。そして次の標的が仲間外れにされるまでグループに戻ることはできないのだ。
綾はそんなグループが大嫌いだった。自分が仲間外れにされないよう、みんなで誰かの悪口を言い合っていた。綾はあまり口を挟まなかったので何度か「いい子ぶりっこ」と言われ、仲間から外された。
それでもグループを出ないのは一人になるのが怖かったからだ。今さらどのグループにも入れそうになかった。こんなに生徒の多い学校で独りぼっちというのは、いかにも嫌われ者で根暗な感じがして、とてもグループを離れる勇気は湧かなかった。
担任は、女子グループでそんなことが起こっていることなど気づきもしないのだろう。派手で反抗的な綾のグループは教師たちからいつも目をつけられていた。

家や学校でいやなことがあると、綾の足は自然と千花のアパートに向いた。
「あら、綾ちゃん、いらっしゃい」
のんびりした調子で千花が言うと、綾はふっと呼吸が楽になる気がした。千花は綾をいろいろ問いただしたり、綾に不必要に気を遣ったりすることはなかった。綾は千花のアパートでは自然体でいられる気がした。

「綾ちゃん、何か飲む？」
「うん、りんごジュース飲みたい」
「りんごジュースね。ＯＫ」
机の上のラップトップコンピュータの画面を見て、綾が尋ねた。
「千花ちゃん、仕事してたの？」
「うん。でもちょっと休憩しようかな」
千花は二人分のりんごジュースとピザ味のポテトチップスをテーブルに運んだ。
「あ、このポテトチップス、好き」
「千花ちゃんが来たときのために買っといたのよ」
「本当？」
「うん。私が誘惑に負ける前に来てくれて助かったよ。一人で食べちゃうとまた太るから」
「別に、全部一人で食べなくても」
「開けちゃうと、もう止められないのよ」
「食いしん坊だなあ、千花ちゃん」
「綾ちゃんだって食べちゃうでしょ？」
「ううん、半分ぐらい食べて、あとは残すよ」
「すごいねえ」
「全部食べると、自己嫌悪に陥るの」
「自己嫌悪ねえ」

休憩を終え、再びコンピュータに向かう千花のそばで、綾はゆったりとした気分でいた。
「何だかここ、くつろげるなあ」
綾が言うと千花はキーボードを打つ手を止めずに言った。
「小さいころから、しょっちゅう来てるもんねえ」
綾が幼かったころから母はフルタイムで働いていた。それで綾は、家で仕事をする千花によく預けられていた。仕事もあったろうに千花は綾の面倒をよく見てくれた。公園に連れて行ってくれたり、一緒に散歩したりした。昼食も家で食べるものよりもよっぽど手の込んだものが出された。綾は幼心に、実は千花が本当の母なのではないだろうかと思ったりもした。

学校は相変わらずきつい場所だった。
「ねえ、信じられる？　美香さあ、この間、塾には通ってないって言ったじゃん？　でもね、学進館の前にいるのを見たんだ、私。自分だけ頭よくなりたいんだよ。せこいよね」
「ホントだ」
「せこい、せこい」
グループのメンバーの一人、舞子が切りだすと、そこにいたメンバー全員が一斉に相槌を打つ。
『また始まった』

うんざりしながら聞いていた綾に、ちひろが聞いてきた。
「ねえ、綾、どう思う？　何かさあ、美香って、自分だけ良ければってとこ、前からあったよね」
同意を求めるその調子に、綾はますます嫌気がさしてきた。
「別に塾の中にいたわけじゃないんでしょ。たまたま通りかかったんじゃない？」
その場に流れる空気を察し、綾は『しまった』と思った。完全にグループから浮いている。舞子とちひろが意味ありげに視線を交わした。またターゲットになってしまった……。綾は重い気持ちで机に戻った。

案の定、綾はその日からグループのメンバーに無視されるようになった。そして今回はどうしたことか、それだけでは済まなかった。グループのメンバーたちが一体どんなことをクラスメイトに吹聴したのか分からない。だが、何かとてもひどい噂を流しているのは間違いなかった。クラス全員があからさまに綾を無視するようになった。
綾が近くを通ると、そばにいた生徒たちがふっと違う方向を向く。ひとかたまりになった女子が遠くからこちらを指さして笑っている。綾がそちらに視線を向けると、すっとよそを向く。綾に話しかける者は誰もいなくなり、机も綾からわざと離すようになった。
『負けるもんか』と綾は思った。こんな子どもっぽいやり方に負けるなんて、悔しすぎる。悪いのは私じゃない。確証もないのに陰口をたたく人たちが幅を利かせているようなこんなクラス、絶対間違っている。

無視は、綾にはさほど効果がないとでも思ったのだろうか。いじめの質が変わってきた。上履きがぼろぼろに切り裂かれていた。不用意に自分の椅子に腰掛けたら、お尻が濡れた。椅子が水浸しになっていたのだ。机の中から使用済みのタンポンが出てきた。ノートにはひどい言葉の数々が汚い字で書き殴られていた。
子どもっぽくて低俗極まりない、ばかばかしい仕打ちだと綾は思いながら、朝、起きれなくなっていった。

綾は学校に行かなくなった。

「一体、何がやりたいんだ？　将来就きたい職業は？」
家にやって来て担任が聞く。
「……」
「何かあるだろう？」
担任が身を乗り出す。上目でにらんで綾は答える。

「別に」
一体なぜ、やりたいことがあるなんて思うのだろう。こんなつまらない世の中で、生きる意味さえ定かではないのに、やりたいことがある方がおかしくはないだろうか？なぜみんな自分だけが正しいような顔をして私にいろんなことを教えたがるのだろう。なぜ自分が正しいなんて思えるのかさっぱり分からない。

両親の風当たりはますます強くなってきた。学校に行かないことを二人して責め立てる。
「お前は怠け者なんだ」
「学校に行かなくて苦労するのは自分でしょ」
「わがままにもほどがある」
と、顔を合わせるにつけ言ってくる。
学校は、行かなければならないところなのだろうか。行っても勉強どころではないというのに。いや、それ以前に勉強すること、それ自体の意味も分からない。学校のことは考えるのもいやだった。

## 二

「ねえ、綾ちゃん、私と旅行しない？」
叔母が突然そう切りだしたとき、綾は無表情に叔母を見た。
「何言ってんのよ」
母の祥子は厳しい口調で妹に返した。
「綾ちゃんは学校に行ってないんでしょう」
千花は平然と答えた。
「だからって、わざわざ学校から遠ざけるようなことをしないでよ」
「綾ちゃんが学校に行かないのにはいろんな訳があるのよ。別にさぼっているんじゃなくて。こういうときは気分転換が必要なんじゃない？」
「何知ったようなこと言ってんの。綾はもともとがぐうたらなのよ」
綾はいやな気分で二人の話を聞いていた。
「本に書いてあったわよ。不登校は心の問題だって。家庭でももうちょっと……」
「子どももいないあんたに、そんなこと言われたくないわよ」
祥子はぴしゃりと言い放った。が、次の瞬間、はっとして千花を見た。千花はやや青ざめて口をつぐんだ。綾はこの家から離れられるのなら旅行もいいと思った。
「私、行く」

祥子と千花が同時に綾の方を振り向いた。ややあって、祥子は投げつけるように言った。
「勝手にしなさいよ」
そして、「あんたの病気で迷惑かけないでよね」と千花に向かって激しく言い放った。

勝手にしろと言った祥子も、まさか千花が海外を選ぶとは思っていなかったのではなかろうか。その後、姉妹の間でどんな会話がなされたのか綾は知らない。延び延びになっていた旅行にいざ出発する段になって気づいてみたら、行き先はヨーロッパということになっていた。
あの両親が自分のためにそんな大金を出してくれるとも思えない。しかし、旅費のことを聞く気にもなれなかったので、綾は成り行きにまかせていた。

飛行機が離陸したとき、綾は今まで感じたことのない解放感を味わった。離陸とともにふわりと身体が浮き、体をぐるぐる巻きにしていた見えないリボンがするするとほどけていくのを感じ、私は自由だという感覚が身体の奥からこみ上げてきた。
ひとしきり自由な気分に身を任せていた綾だが、ふと、気になっていたことが頭をもたげた。

「千花ちゃん、病気なの？」
千花は読んでいた本から視線を綾に移した。
「病気？」
「うん、お母さんが言ってた、あの」
「ああ、あれ」
千花はなんでもないように笑った。
「私、鬱ってお医者さんに言われてて、ずっと薬を飲んでるの。薬を飲んでるから症状も落ち着いてるし、大したことないよ」

初めての海外旅行ではあったが、綾は特に興奮や期待みたいなものも感じることなく、ただ叔母について歩いた。関空からアムステルダム経由でスコットランドに入った。千花がいるので言葉の心配はいらなかった。エジンバラ空港は思ったより小さかった。入国審査の背の高い男性が親しげに話しかけてきた。綾はドギマギしながら、千花に教えられた入国審査用の英語を誦（そらん）じた。
空港を出るとき通りかかったチェックインデスクの前には、白い肌に様々な髪の色をした人々が何列も列を作っていた。綾はそれぞれに異なる髪の色を見て、ふと学校を思い出した。学校では髪は黒でなくてはならない。スカートの長さは膝丈。時々抜き打ちで服装検査があって、スカー

ト丈の怪しい生徒は膝をついた姿勢で床に座らされる。そうしてスカートの裾が床につかないと、「短い」と指導を受ける。今どきそんな長いスカートを着る方が屈辱的に恥ずかしいというのに。

生徒手帳にはスカートのひだの数、髪の長さまでこと細かに定められている。勉強をするのになぜそこまで細かい規則が必要なのか、綾には理解できない。全員に同じ格好を強要することが生徒の心にも影響していると言えないだろうか？　人と違う考え方をする人間を受け入れない原因の一つになっているとは言えないだろうか？　それぞれの髪の色が違って当たり前の国で様々な色を眺めながら、ここにはあんな校則はないだろうと綾は思った。

インフォメーションセンターでエジンバラ市内のB&Bに宿を取ってもらった。

「B&Bって聞いたことある？」

千花の質問に綾はかすかに首を傾げた。

「日本で言う民宿ね。一般の人のお家の一室を借りて寝るの。夕食は出なくて朝ご飯だけ。ベッド&ブレックファーストの略よ」

何も答えない綾に構わず千花は続けた。

「私、B&Bに憧れていたのよねえ。今までの海外旅行ってホテルにしか泊まったことないの」

B&Bではすらりとした女性がにこやかに迎えてくれた。千花と同じぐらいの年齢だろうか。ジーンズに、身体にぴっちり沿ったピンク色のTシャツを着ている。明るいブロンドの髪とピンク色は割とよく合うなと綾は思った。Tシャツとジーンズの間から形のいいおへそが見える。

女性は自分をジェイニーだと自己紹介した。千花とジェイニーは軽く挨拶を交わして握手した。ジェイニーは綾に視線を移し、何か言ったが綾は少しも分からない。千花が横から通訳した。簡単な挨拶だったが綾は緊張した。ジェイニーは綾にも手を出して握手を求めた。綾はその手を握ることを少しためらってから握り返した。

千花の説明によると、ジェイニーとジェイニーのご主人のデイビッドさんとで、このB&Bをやっているらしい。

こぢんまりした部屋は清潔でおしゃれだった。ベッドが二つと、テーブルに椅子が二つ。それぞれのベッドサイドにはベッドカバーと同柄のサイドランプ。電気ポットとカップ二つに様々なフレーバーのティーバッグや砂糖にポーションミルク。設備はホテルのものと大差はないが、全体的に暖かく家庭的だった。

翌日は空が曇っていたが、綾の心は以前より軽くなっていた。ダイニングルームでは他に二組の客がすでにテーブルに着いていた。二人の子どものいる家族連れと、年配のカップル。全員白人だった。

ジェイニーは、千花と綾がダイニングルームに入ると、他の客に紹介し、続いて千花たちに他の客を紹介した。みんな軽く挨拶し、千花も同じようにした。朝食も品数、量ともにとても多く、綾には珍しいことだらけだった。

八月のエジンバラはとても清々しかった。あちらこちらにかかるハンギングバスケットの花はカラフルで美しかった。

「エジンバラは世界でも有数の美しい街なんだって」

千花の言葉通り、古い石造りの建物が並ぶ街並みは確かに美しかった。綾が心に描いていたヨーロッパの街のイメージを少しも裏切らなかった。

ロイヤルマイルの土産店をいくつか冷やかして歩き、並んでいる土産物を楽しんだ。ロイヤルマイルを登り切るとエジンバラ城がある。大きな岩の上に鎮座する威風堂々とした城だ。城の入り口には、テレビで見たことのある兵隊姿の番兵が二人、身じろぎもせず立っていた。

入り口から少し入ると大砲が置いてある。

「これ、今でも使われているんだって。時刻を知らせるためらしいよ」

砲台に立つと、エジンバラの整然とした街並みと、その向こうに海が見える。

「あれは北海よ」

千花は海を眺めながら言った。おぼろげに学校で習った記憶のある名前だ。

「明日は北の方に足を延ばしてみようか。行ってみたいところがあるんだ」

千花は海から目をそらさずに言った。

スターリング駅から路線バスに乗り換え、ウォレスズモニュメントに着いた。駐車場の横に男の像がある。スカートをはいている。

「千花ちゃん、これ誰？」

「ウィリアム・ウォレス。昔、イングランドの支配からスコットランドを救うために戦った英雄よ」

「ふーん」

「『ブレイブ・ハート』って映画知らない？」

綾は首を横に振る。

「メル・ギブソンって俳優が監督と主演をした映画」

「知らない」

「しょうがないなあ。綾ちゃん、今度一緒に映画観ようね」
「……」
「この像はその映画のあと作られたのよ、きっと。ほら、ここに書いてある」
像の足元に「FREEDOM」と彫ってあるのが見える。
「映画でウィリアム・ウォレスが叫ぶのよ」
千花は両手の拳を上げると言った。
「フリーダーム！」
不意に、千花の声が詰まる。像を眺めていた綾は驚いて振り向いた。千花の目から涙があふれている。と同時に、千花は顔を覆ってうずくまった。肩が激しく揺れ、嗚咽が漏れる。突然、東洋人の女が泣きだしたのだから、周りも驚いたのだろう、通りがかりの人々がちらちらとこちらを見ている。
綾はひどくうろたえた。いつも明るく穏やかな千花が泣くところなど想像したこともない。その千花が思いもかけずこの異国の地で、思いもせぬタイミングで号泣しているのだ。まったくどうしてよいのか、声をかけてよいのかさえ分からない。千花に触れることもできず、綾は身をかがめ両手を膝について千花の名前を呼んでみた。しばらくして千花は嗚咽しながら答えた。
「ごめ……ん。大丈夫。ごめん……」
そう言いながらも千花は顔を上げない。ただ必死で涙をこらえようとしている。
三十分も過ぎたろうか。綾にはとても長く思えた。千花がゆっくりと立ち上がった。
「あた、た……。足が……しびれた。いやね、歳をとると」
綾は黙っている。千花の泣きはらした目、すっかりくずれた化粧を見て、何と言っていいのか分からなかった。
「時間とってごめんね。さ、行こうか」
いつも小綺麗にしている叔母が、こんなに化粧のはがれた顔でこの観光名所を歩き回るのかと綾は驚いた。二人は黙って坂を登る。両脇に木が生い茂り、足元には野草が揺れている。ウォレスズモニュメントというのは高い塔だった。スコットランドのために戦った英雄を記念して建てられたと、叔母はまだしゃくり上げながら説明した。内壁に沿って作られた石造りの螺旋階段を上る。千花は時々思い出したようにウォレスの戦いについて説明するが、二人ともほとんど上の空だった。
いくつ部屋を見たろう。ある部屋の隅のガラスケースの中に展示してある大きな剣の前で、千花の足は止まった。
「ウィリアム・ウォレスが使った剣……」
と言いかけると、再び千花は涙を流し始めた。今度は声も

出さぬ静かな涙だった。綾は気づかぬふりをした。
二人は塔の一番上のバルコニーに出た。スターリングの町が一望できる。古い石造りの建物が並んでいる。道路を走る車も見える。
「あの橋、あそこでウォレスが激戦したって」
一通り見たあとだったので、当時の人の服装や武器を綾は想像できた。キルトと呼ばれる民族衣装を身につけて、大きな剣を振るウォレスを思い描いてみた。
「あっちに見えるのはスターリング大学」
大きな建物を指さし、千花は言った。
「あの大学に私の元カレは通ってたの……。スティーブっていうの」
綾は思わず叔母の顔を見た。千花の身辺に男性の話なんて今日まで聞いたことはなかった。
「スコットランド人の彼と一緒に映画館で『ブレイブ・ハート』を見たの。すごく感動した。彼が一緒にウォレスズモニュメントを見に行こうって約束したの」
綾は内心驚いていたが、何も言わなかった。ただ黙って聞いていた。
「ごめんね。綾ちゃんのための旅行のつもりだったのに、なんで私、スコットランドを選んだんだろ」
横を向いたままそう言うと、千花は再び涙を流し始めた。
『ホント……』と綾は思った。『なんでこんな遠くまで旅して、私は千花ちゃんの子守りみたいなことしてるんだろ』
空には低く明るい雲がたくさん浮かんでいる。ああ、私、外国にいるんだなあと綾は思った。空はとても薄い青色だった。
夕方、スターリングからアビモアに向かう列車に乗った。さっきまでの明るい雲は、厚い灰色の雲に変わっていた。空からポツポツと雨が降りだした。車内はしんとしていた。綾は車窓に当たる雨の滴を見ながら妹のことを考えていた。侑は今ごろ何してるだろう。時差は何時間だっけ？　お土産を催促されたけど何がいいだろう。そう思う一方で、再び侑への憎しみが頭をもたげた。侑は何もかも持っている。本当の父親も、欲しいものは何でも。かわいい容姿も、そして母の愛さえもぜんぶ侑のもの。
それにひきかえ私はどうだろう。侑みたいに両親にこびる素質はないし、かわいいと言ってもらえる容姿もない。義理の父も、母も、道ゆく人もみんな侑だけを見ていて、侑だけに微笑みかける。私に振り向くときは叱るときだけ。侑がいなかったら、私の人生、少しは違っていたかも知れないのに。
千花は、綾が知っている千花とは別人のように沈んでい

る。暗い車窓にはしきりに雨の粒が当たっては流れていく。綾は急に激しいホームシックを感じた。でも一体、何を懐かしめばいいのだろう？　義理の父とは会いたくもない。今さら母に甘えたいとも思わない。

綾は侑と共有している自分の部屋を思い浮かべた。十畳の洋間で、床にはオレンジ系の幾何学模様のカーペットが敷いてある。ドアを開けて向こう側が綾のベッド、手前が侑のだ。東向きの腰高窓に向かって学習机が二台置かれている。綾は自分のベッドが無性に懐かしく感じられた。極めてありふれたベッドに、母が買ってきた安物のカバーが掛けてある布団がどうしようもなく懐かしい。そして、その部屋でたわいない話をする相手である侑に、とても会いたいと思った。

## 三

アビモアに着いたとき、すでに辺りは暗かった。いや、雨のせいで空がどんよりしていたので、実際より遅い時間に感じたのかも知れない。雨の中、手近な店で買った傘をさして、二人は黙って歩いた。

インフォメーションセンターは開いていた。太った男が愛想よく笑いかけながら用向きを聞いてきた。綾も千花もニコリともしなかった。綾の願いは無事に今夜の宿にたどり着けることだけだった。千花は沈んだ声で男と何度かやりとりした。男は二度ほど電話をかけた。おそらく宿を当たってくれているのだろう。しばらくして、千花は小さな声で礼を言い、地図を受け取ると出口に向かった。綾は黙って千花の後を追った。千花は沈んだ声で綾に説明した。

「今夜の宿、近くにとれたの。歩いていこう」

しばらく歩くと、何かを揚げているようなおいしそうな匂いがしてきた。匂いの元はすぐに分かった。『Fish & Chips』と書かれたネオンが窓に出ている。綾はその窓の前で立ち止まった。千花が泣いてばかりいるので朝から何も食べていなかった。さすがの綾も限界だった。

「千花ちゃん、お腹空いた」

千花もようやく立ち止まった。

「……。あ、そうだね。そうだよね……」

千花は先にガラスのドアを押して中に入った。

千花が注文したフィシュアンドチップスを受け取るのを見て、綾はあきれた。

「千花ちゃん、一体何人分注文したの？」

大きな白いプラスティック容器に左右から大きくはみ出した魚のフライと、ファストフード店のフライドポテトの二十人分はあろうかと思われる容器一杯に詰め込まれたポ

テト。容器一つ分で二〜三人は食べられそうだ。
「え？　Mサイズのフィシュアンドチップスを二つよ」
「Mサイズ!?」
綾は吹き出した。
「これでMサイズ？　これがMサイズだったらマックのポテトは何サイズ？」
綾があまりに笑うので、千花もつられて笑った。
「ホントだね」

空腹を満たし、B&Bのベッドに足を投げ出して、綾はようやくくつろいだ気分になった。千花がシャワーを使う水の音を聞きながら、何をするでもなく天井を眺めた。そうしていると再び、自分は外国にいるんだなあという実感が湧いてきた。と、同時に、父母と妹のことがまた思い出された。私はいつからみんなに疎まれる存在になったんだろう。そもそも愛された時期なんてあったんだろうか。
綾の実父と母は、綾が一歳のときに離婚した。そして、綾が三歳になる前に母は今の父と結婚し、五歳違いの妹を産んだのだ。そもそも自分は望まれて生まれてきたのかさえも疑わしい。なぜ、綾の両親は結婚し、あっという間に離婚したのか。なぜ、綾は本当の父の名前すら教えてもらえぬのか。「名前なんか知って何になるの」と母は言うけれど、綾にとっては実の父親なのだ。名前を知って当然ではないか。綾は大きなため息をついた。
「全くかわいげのない子どもだ」と義父は言う。綾は義父とは全然言葉を交わさない。どうせ私の言葉はこの男には通じない。そんな綾のことを義父は口癖のように「かわいげがない」と言う。そして当てつけるかのように侑のことをかわいがる。実際「侑はかわいいなあ」と何度も言う。いつもニコニコして、かわいいかわいいと言われれば誰だって甘え上手になるだろう。逆にかわいがってもらうことなどなく、振り向いてもらえたと思ったら小言か叱責をうけるだけで素直でかわいい娘になりようはない。いや、死んでも素直になんかなりたくない。
仰向けの姿勢から横向きになったとき、綾はふと、千花のシャワーが長すぎるのを不審に思った。いやな予感に襲われながら、綾はバスルームのドアの前に立った。
「千花ちゃん、千花ちゃん」
ノックをするが返事がない。胸騒ぎがしてきた。
「千花ちゃん、開けて！」
やはり何の返事もない。どうしよう。言葉の通じない国で千花に何か起こったとしたらどうしよう。綾は目の前が真っ暗になった。強くノックしながら声をかける。
「千花ちゃん！　開けて！　千花ちゃん！」